

再び欲望に溢れたこの世界に

ソルティーナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくほう
欲望―

欲望、もとい欲とは何かを欲しいと思う心―

「欲望」という言葉だけ見れば「欲望＝悪」という計算式を思い浮かぶ人は少なからずともいるであろう。欲望を持っているものはどこか醜く思われがちだ。しかし、欲望とは悪いものだけとは限らない。人間であれば、

「お金が欲しい。」

「あれが食べたい。」

「あの子と付き合いたい。」

「働かずにずっと寝ていたい。」

このような、人間誰しもが思いそうな些細なことも全て欲望。

欲望とは人間……いや、生きるもの全てが持つ感覚。些細なことも、重大なことも全て欲望なのである。

何かを得たい、何かを満たしたい欲を満たすために人間や生物は何らかの行動、手段をとる。そして、やがて欲望を満たすための手段が終え、ようやく欲望が満たされる。皆、そうやって生きている。

欲望とは生物にとって欠かせない存在。

欲望とは生きる上で最も重要なエネルギーなのである。

この物語は、そんな人間の欲望を利用し再び悪事を働こうとする脅威との遭遇、そこに立ち向かう者達の戦い。そして、戦いと欲望の渦に巻き込まれてしまう少女達のお話。

目次

プロローグ	1
第一話 旅人と笑顔のバンドと実験	4
第二話 謎の会社とヤミーと駅前襲撃	14
第三話 戦いと敵と夕日	26
パンツと怪力娘と再臨の王	36

プロローグ

プロローグ

この物語は、これから巻き起こる事件に繋がる数年前の出来事。

とある街の外れにある工場跡地。辺りには残された資材やコンクリートブロックがあるのみ。人気などするはずのない場所に、エスニック調の服を着用している1人の青年が立っていた。

彼は汗を垂らし、顔に土や血などが付着し酷く汚れ、さらに疲れ切っている様子にも見える。しかし、そんな疲れている様子から一変、いきなり何かを鋭く睨みつけるように険しい顔をする。そんな彼の目線の先には、まさしく怪物と言える存在が立っていた。

その怪物の姿は、今から約一億年前の白亜紀後期に、かつて地球上に存在していた恐竜の頭蓋があり、とても人とは言えない姿をしていた。

胸部には、眼の上の長く伸びた二本の角と鼻面に短かな角の三本の角を備えた、角竜の代表とも言える草食恐竜『トリケラトプス』

肩の鎧には、嘴のような大きな顎と鋭く伸びる後頭部、そして最大の特徴の大きな翼を備え大空を飛び回った大型の爬虫類(翼竜)の『プテラノドン』

そして頭部には、陸上の肉食生物の中では史上最大級の生物で、最大9tもの凄まじい咬合力くわうりょくがある強靱な顎と分厚い頭。数ある恐竜の中で最も有名でその強さ故『恐竜王』と呼ばれるほど。

名実ともに、恐竜の代表格とも言える大型の肉食恐竜、別名T-R EXこと『ティラノサウルス』

その三体の恐竜を示した頭蓋、そして背部に伸びる紫のマント。この世に存在するはずが無い異形が立っていた。

青年と怪物は互いに睨み合い、怪物がジリジリと歩み寄り青年に距

離を詰める。それを確認した青年は短く深呼吸をした刹那――。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

青年は喉が壊れる勢いで声を張り怪物に向かって大きく吠える。吠える彼の眼は怪物と似た紫色へと変化し、彼の周りからは黒いオーラが周りに広がる。彼も、またあの怪物のように人ならざるものなのか…。

そんなことを考えるのも束の間、何処からか男性の荒々しい声が聞こえて来ると共に、声の方向から火炎弾が飛来し青年の一步先に着弾する。青年に近付いていた怪物は後退し、飛んできた火炎弾のお陰か青年の周りに広がっていた黒いオーラは消滅した。

そして、青年は火炎弾が飛んできた方角から再び飛んできた何かを受け取る。彼の手には金色に縁取られ中が赤いパーツで造られたメダルが3枚。

そのメダルには大空を舞う鳥類を模したような絵が描かれている。彼はその中で一つのメダルを手に取り、何かに気づいたのかそのメダルをじっくりと見る。

「…わかってる。お前が…本当にやりたいことなんだよな。」

そう言葉を発しながら、青年は自身の腰に手をかける。彼の腰には特殊な形状、模様をしているベルトが巻き付けられていた。

よく見ると、そのベルトには3つの窪みがあり、そのうちの右側の空間に、手に持っていた赤のメダルを入れる。さらに、もう一枚中央にメダルを入れる。少し間を開けて、もう一度言葉を発する。

「……行くよ。」

誰かの名前を呼んだのだろうか、うまく聞き取れなかったため定かではないが彼はメダルが飛んできた方向に視線を向け、彼が持っていた最後のメダルをベルトに入れる。

そのメダルは他2つと似て異なる見た目をしていた。そのメダルには今にでも割れそうなくらいの大きなヒビが入っていた。

彼は決意を固めた様子を見せながら、ベルトを斜めに傾けさせ右腰に備え付けられていた、黒色をベースに金色の模様が描かれた特殊なサークルを手に持ち、顔の横に持つてくる。

その瞬間、場の空気は張り詰める。そして、謎の機械音が響き渡る。青年は真剣な表情へと変わり、様々な思いを胸に掲げる。

世界の終末を防ぐために―

皆の明日を守るために―

彼の思いを…無駄にさせないために―

そして、己の欲望のために目の前の敵を倒す戦士へと姿を変える言葉を叫ぶ。

「変身ッ!!」

第一話 旅人と笑顔のバンドと実験

ザツザツザツザツ……

ザツザツザツザツ……

1人の青年はただひたすらに砂漠を歩き続ける。布を一枚吊り下げている大きな木の枝を片手に目的地に辿り着くために休憩を挟みながら砂漠を歩く。

彼は数年間、高校生になる歳から世界を巡り旅をしてきた。時には様々な人と出会い、時には助け合い、時にはたくさんの修羅場を乗り越えてきた。栄えてる国や貧困地域、更には今も尚世界中で続いている紛争地帯へも足を運んだことがある。

何故、彼がわざわざそんな所へ向かうのか。それは、彼にとある目標と目的があるからだ。世界中の子供たちを救うこと。世界中の困っている人達に手を差し伸べて力になってあげること。そして、たくさんの人との絆を深める。それが彼の目標だ。

現在はその目標も交えつつ、今は自分が求める物、彼のもうひとつ

の目的を果たすため調査を行いながら世界を渡り歩いているのである。

「…あそこか。」

と、青年は言葉をつぶやく。彼の目線の先にはいくつかの建物が見える。彼が目的地として目指していた場所だ。彼はそこへ赴き、自分の目標と目的のためにさらに人との繋がりを増やしていく……。

場所は変わり、現代の日本。

ここは近年話題となっているスタジオ兼ライブハウス『C i R C L E』

ここは日本を代表する都市。近年、日本では都心を中心にガールズバンドが全国に広まりつつある。通常の男性と女性の合同のバンドや男性のみのバンドではなく、女性のみで構成されたバンドが近年では増えてきており、逆に前者のバンド達は最近は見なくなってきているほどだ。さらに、その年代は高校生の歳で組むようになってきているとか。とある評論家によると、近い将来『大ガールズバンド時代』という時代になるだろうと言われていたほど、ガールズバンドは人気を博している。

そんなガールズバンドブームを巻き起こした一つであるC i R C L E。そしてそのきっかけとなるバンドのうちの1組が集まっていた。

「みんなー！今日は面白そうなお話を用意して来たわよー！」

こころが面白そうな話を用意したって言うけど…な…んか嫌な予感がするのは私だけかな？こころの話す内容にはいつも振り回されてばかりだからなあ…。

去年なんか、思いつきで豪華客船に乗って怪盗ごっこが始まるし、このころの屋敷で見つけた古い地図で南の島に行って探検しちゃうし、最近だとポピパの皆を励ますって言って空まで飛んじちゃうし、笑顔パトロール隊って言ってボランティア活動始めちゃうし…。

…まあ、ボランティアすることは悪くないし寧ろ良いことだし、豪華客船も南の島も楽しかったけど。でも『ハッピーフライトモード』だけはもうこりこり。最初マジで死ぬかと思ったよ…。

話を戻して…、こころは、何やら面白い話を用意したと言葉にし一足先にC I R C L Eのテラスに集まっていた私たちのもとへ駆け寄る。

「面白い話?」

「ええ!とーっても面白いお話よ!」

「フフ:実に興味があるね:是非聞かせてくれないかい?」

はぐみに続いて薫さんが反応する。3バカが絡むと余計ややこしいことになるんだけど、今はまだ大人しいな。と言ってもこころが内容を話せばいつもみたいになるんだろうけど…。

「商店街のお婆さん達が話してくれたんだけど、ビルとかがたくさん建っている街の中心に、昔ミイラっていう怪物さん達がいーっぱい居たらしいの!」

…え?

「ミイラ?」

「に、にわかには信じ難いね…」

「ふええく:そ、それ本当なの?こころちゃん。」

「そんな非現実的な…」

どうやらこころが話したかった内容とは昔、街の中心に大量のミイラが屯っていた話らしい。そもそもミイラって、簡単に説明すると自然乾燥で長期間原型を留めて保存された死体のことであつて。そんなミイラが、近代化が進んでるこの街に大昔の死体が歩いているという話は幾ら何でも信じられないなあ。

「そうかしら?私はこの話本当だと思うわよ!」

「へー:で、その根拠は?」

「だって、お婆さん達は嘘をついてる様には見えなかったわ！」

「そんな見た目だけで判断出来ないでしょ… あー… でもこころなら出来てもおかしくないか…」

こころは折れることなくひたすらに目を輝かせこの話が本当だと思いつける。私はあまり信じてはいないけど、少し本当なのかと思いついてもいる自分もいるんだよなあ…。こころは人が思っていることを正確に見抜ける力があって、私もこころのその観察力に思っていることを見抜かれたりたまに助けられたりしたし。

まあ「お婆さん達は嘘をついていない」という言葉をだけで信じるのはどうなのって話なんだけどね。

「それに、この話には続きがあつてね」

『続きっ。』

「その、街中にいたミイラさん達を赤色の人と紫色の人の2人でそこにいるミイラさん達をやっつけてたらしいの！」

もつとも謎なワードが飛び出てきた!?

「赤色の人と紫色の人ー？」

「何それ…どっちも気になるんだけど。」

「そ、それって、何かのヒーローものの撮影とかなんじやないかな…？」

こころが言った赤色人と紫色の人がミイラ達をやっつけていた。確かに花音さんの言う通り、その場面だけで見るとよく日曜の朝に見るようなヒーローものの撮影と思ってもおかしくはないね。むしろ、そうとしか思えない。

こころの話が無我夢中で聞いていたはぐみや信じてはいたが少し怖がつっていた薫さんも、流石に少し困惑している。

こころはどうすれば皆にミイラは存在していたと証明出来るか、腕を組みながら頭を傾げて考える。そうしてこころの頭の中で出てきた答えはー。

「そうだわー皆でこの街の周辺をパトロールしてミイラさんを探し出しましょー！」

はい、嫌な予感的中しましたね。

「絶対いないって…」

「そんなこと、実際に動いて探してみないとまだわからないでしょ？ さあ、皆行きましよ！笑顔パトロール隊、出動よー！」

そう言っところはずぐさま立ち上がり、とてつもないスピードで当てもないままに走り出した。取り残された私達は流石にこのまま放っておく訳にはいかないと思い（一部）すぐさまこの背後を追いかけるのであった。

場所は再び、異国の砂漠。

旅の途中だった俺は目的地の町に少しの間居座ることにして、ひとまず町の様子を伺うことにした。町の中心に行くとき大きな噴水や露出した水路があり、涼し気な雰囲気を感じられる。観光客や地元の人達も多く集まってきたっており、中々賑やかになっている。

「いいところだなあ…ここ。」

この地域では数少ない栄えた町。見た感じでは人同士で争ったり喧嘩したり、盗みを犯すような雰囲気は今のところないように見える。むしろ、楽しく会話をしている女性の人達や、町の人たちが協力をして何かを建てようとしていたり町全体が生き生きとしている。

「この町の人たちも人柄が良い人が多いし、すつごい平和だなあー！」俺は大きく伸びをして、噴水近くのベンチに寝そべると自然に向いた視線の先に、ある光景が目に入った。

「!!」

町の人達が笑顔になりながら話している中、誰もいない路地裏の角

にしゃがんで泣いている女の子が見えた。それと同時に、俺の脳裏に1つのある記憶が浮かんでくる。

「……………」

俺はスツと起き上がり、何を思うことも無く歩きだし彼女の傍へと近づいていく。

「ううっ……ぐすっ……ママあ………」

俺は泣いている少女と同じ目線になるようにしゃがみ、「どうしたの？」と声をかける。すると、少女は俯いていた顔を上げて肩をビクツとさせ、少し驚いた表情をする。

「あ、驚かせちゃってごめんね。君が泣いている姿が見えたからさ……それで、どうしたの？」

女の子は、俺の質問に少し間を置いてから答える。

「……………グスツ……ママと……はぐれたの………」

その答えを聞いて、俺は迷うことなく女の子に提案をする。

「よし……それじゃあ、お兄ちゃんと一緒にママを探そうか！そうした方が安全だし、1人で探すより見つけやすいからね。」

と答えて右手を差し伸べ、一緒に探しに行こうという意思を見せる。

本来なら、知らない人に話しかけられたとなるとたとえ子供とはいえ知らない人の言葉を信じる事はないと思う。

だけど、ただ純粹に母親を探し出してあげたいという俺の思いが彼女に伝わったのか、流していた涙は少しずつ消え、少しずつ笑顔を取り戻し「……………うん！」と少し時間を置いて頷いてくれた。その頃にはもう、先程までの哀しみの顔は無く彼女の表情に笑顔が戻っていた。

「それじゃあ、早速探しに行こっか！」

そう言つて、俺は彼女の頭を撫でて立ち上がり右手を差し出す。彼女は躊躇いもなく差し出した手を取り、俺と迷子の子は並んで手を繋ぎながら母親を探しに路地裏から出ていったのであった。

場所は変わり日本一

ガシヤンガシヤン

「おい、実験はどうなった。」

「現在も進行中です。」

カタカタカタカタ

色々な精密機械や工業用機械が立ち並び、ここに務めている人間が作業をし機械の重厚な音が四方八方から聞こえてくるこの場所。

ここは、とある場所の地下工場、いや研究施設というべきだろう。今はとある物を解析して、そこから同じものを複製させ、彼らが求めるものを作る実験を行っている真つ最中である。

「4071枚目、投入します。」

一人の男がそう言うと、部屋にいる男達は一斉に正面にある大きなガラス部屋の方を向く。男達が見ている部屋の中の中心に、銀色のメダルのようなものが何百、何千と無造作に置かれている。そのメダルにはよく見てみると、虎や鍬形、サイや蠍のような生物的な絵や？印などが刻印されている。

そのメダルが置いてある場所に白衣を着た一人の研究員らしき人物が、部屋に置いてあるメダルと同じ形のメダルを片手に入ってくる。

しかし、研究員らしき人物がもっているメダルは形こそ同じだが見

た目が違う。部屋に置かれているものとは違い、外側が銀色に縁取られ、中にかけて黄色となっている。

絵柄は置いてあるメダルの中にある虎の絵と同じ物と、ライオンやチーターを模した絵のメダル。

そして、その男は持つてきた黄色のメダルを銀のメダルが山のようにな置かれている場所へと投げる。男が投げた黄色のメダルが銀のメダルの山へ着地する。

その直後―。

ジャラ…

メダルが人間の手を借りずして独立して動くという、不可思議な現象が起きた。3枚の黄色のメダルを中心に銀のメダル達はその周りを包み込んで、金属的な音を鳴らしながら宙に浮く。

ジャラジャラジャラ…

ジャラジャラジャラジャラジャラジャラ…

だんだんと音は激しくなり、やがて銀のメダルの塊は人のような形になる。

ライオンのような鬣や牙を備える頭

銀色と虎のような縞模様を思わせる黒いアーマーに鋭い爪がある腕を持ち合わせる体

チーターの様に俊敏な動きが出来そうな脚

この世には決して存在してはならない

「ウウウ・・・」

怪物へと変化させた。

その怪物を見て、研究員らの人物達は勿論のこと驚いている・・・と思われるが驚くどころか、怪物が生まれ喜びが見えていた。そう。彼らの目的は銀色のメダルややあの黄色のメダルに秘められている力を利用して、たった今形成された獣人・・・いや、怪物を作ることだったのである。

「成功した・・・成功したぞ!!!」

「急いでセルメダル各種コアメダルを用意しろ!!!」

異形の怪物を作ること成功した次の瞬間、研究室は一気に慌ただしくなる。急いで扉を出て、先程指揮を執っていた男が言っていた『セルメダル』と『コアメダル』というものを取りに行く物や、研究室に居残り謎の機械を動かしたり調整したりと一気に現場が動き出す。それほど先程できた怪物が彼等にとって重大なことなのである。

先程メダルによって形成された怪物は・・・およそ800年前に封印された古の怪物。数年前、現代の日本で復活を遂げ人々に再び恐怖をもたらした存在。人々の『欲望』を糧に生き、力を増大させる擬似生命体。数年経った今その怪物が、再び人々を恐怖と欲望の渦に陥れようとしている。

その怪物の名は――

「今すぐボスにこのことを伝えろ!!」

「グリードの実験に成功したと!!!」

第二話 謎の会社とヤミーと駅前の襲撃

「…素晴らしい。」

白いスーツを着た1人の若々しい男は小さな個室の中、回転する椅子に座り左右にゆらゆらと揺れながら目の前にある6枚のモニターに目を通し、にやりと薄気味悪い笑みをしていた。

モニターの映像内には、とても大きな白い空間の中に人ではなく、2本の足で立ち小さく唸り声を鳴らし、姿はまるで猫のような姿をした異形『グリード』が佇んでいる映像が6つのモニターにそれぞれ別の方向のカメラ映像が流れていた。

「第二段階が終えた…この調子で残りのグリードも復活させて、ようやく新たな領域の第三段階へと足を踏み入ることが出来るというわけか…フッフッフ…」

男は再びモニターを覗ながら、今度は声に出して笑う。すると、後ろの自動ドアが開き1人の研究員が部屋に入ってくる。

「リーダー、先程黄色のメダルのグリードの作成に成功しました。」

「ああ…観ていたよ全て。」

「現在は緑、白、青のメダルを使い新たにグリードを作成する準備を行っています。」

「そうか、そのまま続けろ。それと…赤のメダルの件はどうなっている?」

赤のメダラー

コアメダルと呼ばれる色が入ったメダル。グリードを生み出す際に無造作に置かれていた多くの銀色のメダルはセルメダルと呼ばれる。この2つを組み合わせることで、セルメダルが身体を形成し、やがて意志を持たず生み出したものの欲望のままに従う怪人が生まれる。

コアメダルには通常のメダルと特有の意志を内包したメダルの2つがあつたが、数年前内包したメダルが何者かにより破壊されてしまい、意思を持ったグリードを生み出すことは不可能となった。誰によつて破壊されてしまったのか…。

それを含むメダルに関する話は、まだ先の話…。

男は、赤のコアメダルについて聞くと男は少し躊躇うような顔をしてから口を開く。

「赤のメダルですが… 未だに発見することは出来ておりません。」

「… そうか。もういいぞ下がれ。」

「はっ。」

研究員が部屋から出ると、男は新たにグリードを出現させようとしている映像を観ながら呟く。

「こちらもそろそろ、動いた方がいいか…。」

「…この度は本当にありがとうございました… なんとお礼をすれば良いか…。」

「あ、いえいえ！お礼は結構ですよ。別に見返りを求めて助けたわけじゃないですし。俺はただ、この子を助けたいと思って助けただけですから。」

迷子になつていた少女と2人で母親を探しに行ったあの後、無事に母親を見つけることが出来た。俺と迷子の女の子は町の中心に移動して一緒に大きな声で「おかあさん!!」と叫んだ。すると数十分後に母親らしき人が来て、女の子がその人めがけて走り出して2人は抱き合い、再開した事を泣いて喜んでいた。そして今に至るって感じ。「それじゃあ、俺はこの辺で。もう、お母さんからはぐれちゃダメだよ。」

俺は母親と女の子に別れを告げ、もう迷子にならないようにと注意

する。それを聞いた彼女は首を縦に大きく振り「うんっ！」と強く声に出してにこやかに笑った。俺は返事を聞くと微笑み返して、頭のとっぺんに手を置き優しく撫でる。撫でられた女の子は気持ちよさそうに再び笑顔になる。

「それじゃあ、またどこかで。」

俺は撫でていた手を離し立ち上がり、2人に背を向けて歩き出す。

「バイバイ!!」

そう言つて女の子は大きく弧を描くように俺に手を振る。俺も女の子に手を振り返して、止めた足を再び歩き始めさせた。

それにしても、案外早く見つかつてよかったなあ…。多分、はぐれからそんなに時間が経っていなくてそんなに遠くにも行つてなかつたから俺達の声が届いたんだろう。

へぐすっ… うえええん……………

へうう… ぐすっ…………

「……………」

今、彼の頭の中に先程迷子になって泣いていた女の子と崩れた村の真ん中で泣いていた女の子が浮かんできた。何故今その2人が浮かんできたのか、それは2人の泣いている姿が重なったからである。

しかし、2人の状況は同じではなくもう1人の女の子の記憶の方は、彼が学生の頃旅していた頃の記憶。再開を果たした子供が迷子になっていたあの時、迷子になった子を考えるより先に動いて助けた理由としては今の記憶にある。というよりは、彼が人を助けるようになった理由というべきか。どうしてかというところ

と、ここで青年はあることに気づく。

「あれ？あれ、あれ!?無い!無い!!俺の明日が無い!!」

突然、明日が無いと意味不明な事を言う青年。しかし、彼の言う明日はとても大切なもので昔、彼の祖父に『男はいつ死ぬかわからないから必ず持つておけ』と言われ、生きてから肌身離さず持つている物。

それほど大切なのである。

彼は周りを見渡すと上空で風に乗り飛んでいくハイカラな柄の布が1枚。

「あ!!俺の明日!!」

その彼の言う明日というのは、

「待ってええええ!!!俺の明日!!!」
パンツ

………
パンツであった。

場所は代わり再び日本

ここは都心の中心部。街を見下ろすことができる日本で一番高い展望台、何階建てかもわからないほど高く積み上げられた高層ビルや高級タワーマンションが数多く立ち並ぶこの場所。その中でも一際目立つビルが一つ。ビルの高さはもちろんだが、敷地の広さも桁違いだ。それは通常の株式会社や、大手の企業や会社でも成し得ることのできないほど。

『鴻上ファウンデーション』

それがこの町で一位二位を争うほどの財力を持つ財団だ。しかし事業内容は表向きに公表されておらず、実際のところ何を行われているか、何を製作しているのかいまいちわかっていないが、この街をよく見渡してみると至る所に黒い自販機が設置されている。その黒い自販機は鴻上ファウンデーションが開発したもの。

ただ、その自販機は通常の自販機と異なり、小銭を入れる投入口が

二回り以上大きいのと、千円が入れられないなど、自販機としての役割を全く果たしておらずやはり何をしているのかわからない。

その謎の雰囲気に興味を惹かせたからかわからないが、最近若者の就職率が上がっているらしい。しかし、雇用した人数の8割以上は解雇、又は退職しているらしい。

話を戻して、1人の女性社員が廊下を止まることなく歩く。ビルの最上階にある部屋の前に立ち止まり、片方の扉をノックして「失礼します。」

と一言告げてからドアを開ける。入った部屋の中は、広々とした空間で大きな窓ガラスに囲まれていて、中には高級なソファやテーブル、テレビや絨毯、冷暖房完備で音楽をかけるジュークボックス、ピアノなど広々とした空間を有効活用されていた。すると彼女は手に持っていたバインダーを広げ、中にファイルしていた資料をめくり大きなデスクの前に立つ。

「会長、今月誕生日を迎える社員は5名で開発部署の武田さんと石田さん、生態研究所の佐野さんと田中さん、そして博物館の太田さんでもうすぐ誕生日を迎えるのが5日の佐野さんです。」

「腕がなるね。」苦勞、里中くん。」

「いいえ、これも仕事ですから。」

そう答える彼女の目線の先、まじまじとガラスの向こうの空を眺めている。会長と呼ばれ、赤という派手なスーツを着こなす大柄の男性。振り返って見えた表情はとても和やかな顔をしていた。だが、元々強面だったためあまりそうには見えないが。

彼こそ『鴻上ファウンデーション』の創設者であり会長の『鴻上光生』である。

鴻上は振り返って机の引き出しを開ける。大事な資料を出すのかと思えば、何故か料理を行う際に使用する銀色のボウルに、その中にはゴムベラや薄力粉などお菓子作りに必要なツールが揃っていた。

そう、彼は今ケーキを作ろうとしている。しかしこの会社がお菓子会社だからというわけではなく、ただ単純に鴻上光生はケーキ作りという、見た目とのギャップがありすぎる趣味を持っているのである。彼

は何かの記念日や誕生日を迎える度にケーキを作り贈呈する謎の風習があるのである。先程、里中が鴻上に伝えていた内容がそのことである。

と、ケーキ作りを始めていた鴻上は、ピタリと時間が止まったかのように急に作業を止める。

「そうだ、里中君。君にもう一つ頼みたい仕事がある。」

と少し顔色を変えて里中に話しかける。

「近々、予期せぬ事態が起こりうるかもしれない。数年前の悲劇の様に……」

里中は「数年前の悲劇……」と呟き、顔が少し険しくなる。彼女は鴻上が次に何を言いたいのかを悟ったのかおもむろに携帯電話を取り出す。

「彼らのフォロー頼んだよ。」

そう伝えて、鴻上はケーキ作りを再開し里中は一礼をして部屋を立ち去った。

駅前近くで人が沢山訪れる中心街、1人のスーツの男は人々が行き交う歩道をジユラルミンケースを持ちながら歩き、方向転換をして道中の路地裏の方に入る。

男が入った数秒後、路地裏の入り口付近は一気に絶叫が響き渡りパニックに陥った。その原因はすぐに理解できるであろう。街中を歩いていた人達が一斉に同じ方向に視線を向け、同時に見ているものから避ける様に後ろに下がる。

人々が絶叫しその目に映したものは――

全身に包帯を巻きよろよろと二足歩行で歩く謎の生物であった。

「ウウ…」

見た目はミイラに似ていて、大きさは一般男性と同じぐらいで呻き声や動き方はまるでゾンビの様であった。現代のましてや都心部の中心に今まで確認されていなかった生物がどうしてこのタイミングで現れたのか。

すると、後ろの路地裏から目の前にいる生物がゾロゾロと湧いて出てきたのである。その数は5体、10体、それ以上。

その光景を見た人々は再び叫び、その場所から逃げ惑う。謎の生物達は逃げ惑う人達を追いかける様に走り出す。先程まで人が溢れ返っていた歩道が、そこには元から人は来ていなかったかの様に急激に人の姿を見せなくなっていた。

そして、謎の生物が出現する前に路地裏に入ったスーツの男性が、誰もいなくなった歩道に出てくる。

「…まずは、量産型のヤミーで誘い出しましょうか。」

そう言って、彼は一人歩道を歩く。

一方その頃、ハロハピ一行は…。

「うーん…いないわねえ…」

「やっぱり、お婆さん達の見間違いか何かだっところ。」

私達は笑顔パトロール隊と称して、笑顔のパトロールをついでに、こころが商店街のお婆さんに聞いた数年前に目撃したミイラのような生き物を、ここ数時間CiRCLE周辺をぐるっと一周したが見つからず、場所を変え商店街やショッピングモール前など、人が賑わっていないような場所を手当たり次第に探してみた。

が、それでも未だに見つかっていない状態でこころとはぐみと薫さんの3バカを除いて、私と花音さんは歩き疲れ公園のフェンスにもたれかかっていた。

はぐみは「ミイラは見つかってないけど、街の皆の笑顔が確認できて嬉しい!」と、薫さんは「シエイクスピーア曰く、備えよ。たとえ今ではなくても、チャンスはいつかやって来る。つまり、そういう事さ...」と、いつも通りの反応をするが私は今、それにツッコミをする気力はない。

すると突然こころは、ある事に気づきだす。

「あら?」

「どうしたのこころん?」

「何かあったのかしら、皆走っているわよ?」

こころが向いている方向にいる人たちが、真逆の方向に走っているのである。それも、走っている人たちは額に汗を垂らしながら。

「お、鬼ごっこでもしているんじゃないかな...?」

「花音さん...それにしても人多すぎです。というか、絶対違いますよ。」

「だ、だよね...。」

休憩していた私と花音さんがこころの発言に返答する。さっきの言う通り、鬼ごっこと言うには走っている人数が多すぎる。それと走っている人全員、険しい顔をしていて、とても遊びとは思えない。

「そういうえば、まだ駅前を確認していなかったね。」

「これは、笑顔パトロール隊としては見逃せないわね。皆、今すぐ行きましょー!」

薫さんが駅前に訪れていないことを指摘し、こころがすぐさま駅前に向かおうとする。と、突然横から、駅前の方向から走ってきた中年

の男性に呼び止められる。

「お嬢ちゃん達、今駅前に近づくのはやめときな。早くここから逃げたほうがいい。」

とだけ私たちに伝え、男の人は再び走り去っていった。私達は言われたことがよく理解しておらず、何が起こっているのかわからないが、とりあえず男の人の発言から今駅前は危ないってこと…なのかな？

とりあえず、あの人近づいたらいけないって言ってたんだし駅前の方向に向かうのはやめときまー

「…ってあれ、こころは？」

先程まで私たちの前にいたこころの姿が見当たらない。ここで私は一つの最悪な答えを導き出す。もしやと思い、駅前につながる方向に視線を合わしてみると、

「皆ー早くしないと置いて行くわよー！」

数メートル離れた場所にこころが立っていた。やっぱり…いつのまにあんな遠くまで…、しかもあつち駅前じゃん！

「こころー！そっちは今行ったらダメだって！」

私はこころに戻ってこいと伝えるが、こころは聞く耳を持たずにそのまま駅前へと走り去ってしまった。

これはまずい…。もし、こころに何かあったら…。とりあえず、こころの暴走を止めないと！

そう思った私は考える間もなくこころの後を追いかけた。後ろから花音さん達の呼ぶ声が聞こえた気がしたが、反応する暇も無く全速力でこころを追いかけた。

「……何……これ。」

今、私が見ている景色は本物なのだろうか。視界に広がる現実を受け入れたくない程に、おぞましい光景が私とこの前の前に映し出されていた。

こころを追いかけたあの後、猛スピードで走ってたこころが止まって私に「美咲！やっぱりミイラさんは本当にいたわ！」と伝えてきた。流星のこころも驚いた表情を見せたけど、すぐにいつもの笑顔に戻った。

そんなわけないと、走り疲れて下げていた顔を上げると、包帯を全身にグルグルと巻かれ、まさしくミイラのような化け物が人を襲っている光景が目に入った。しかも30体ぐらいの大群で。

襲っているミイラの周りには倒れている人の姿や、遠くな壁に何かを打ち付けられた様なヒビがあり、その付近には人が倒れていたりと、明らかに普通ではないことがわかる。

あの男の人が言っていた通りだ。ここは今危険すぎる。ここにいたらそのうち私達のところへもやってくる。そうなる前に急いでこころを連れて皆と逃げてー。

「まあ、あのミイラさんあの人達を虐めてるのかしら？ちよつと虐めるのはダメって伝えて来るわね！」

「はあ?!ちよ、こころ?!」

何してんの!?!なんで襲われてるってわかんないの!?!っていうか、伝えるに行くって多分反応しな…。

って言ってる場合じゃない!早く止めないとー。

あ、あれ…。足が…動かない?なんで?

美咲は笑顔のパトロールとミイラの搜索、そしてこころを呼び止めるために全速力で駆け抜け、さらに包帯を巻いたミイラ、通称『ヤミー』が人を襲っている場面を目撃してしまい、疲れと共に足がすくんで動けなくなってしまった。

は、早くこころを止めないといけないのに…、このままじゃこころが…!

美咲はこころを助けなければいけない、しかし恐怖心に負け動けない状態が続き、顔が真っ青になりパニック状態になってしまう。

―後ろから、激しく走行音を鳴らしながら何かが近づいていることも気づかないほどに。

「貴方達、虐めはやめなさい！」

こころはヤミーを目の前に腰に手を当てて、怒ったような言い草で語りかける。ヤミーはこころの言葉に反応するが、もちろん返事をすることはなくただ、こころの方に振り向くだけ。そして、ヤミーは手を前に持ってきてゾンビのようにゆっくりと、ゆっくりとこころに歩み寄りこころに危険が迫る。

しかし、こころにそんなことは気付くはずもなくただただ、ヤミーに虐めるなど注意するだけだ。

「そんなことしてたら、下の人たちが可哀想だわ。虐めるより、もっと楽しいことしましょ！そうすれば、この人もそれに貴方もみーんな笑顔になれるわよ！」

「ウウ…」

返ってくるのはヤミーの呻き声のみ。そしてとうとう、ヤミーの手があと一歩でこころに手が届きそうなどころまで近づかれてしまった。

「こころッ!!逃げてッ!!」

動けずにいた美咲は、今出せる最大の音量でこころに逃げてと叫

ぶ。こころは美咲の声に気付き声の方向に振り返る。

その瞬間、ヤミーはこころに襲うと掴みかかろうとする。

絶体絶命のピンチー。

そのピンチは、ヤミーがいた場所から聞こえた何か衝突したような鈍く重い打撃音と、一人の男性の声によって消え去った。

「大丈夫？」

第三話 戦いと敵と夕日

「大丈夫？」

俺はヤミーに襲われそうになっていた金髪の女の子を助けて、怪我がないかを確認する。それに対して彼女はまるで襲われてないかのような様子を見せて応える。

「…？特に何もなっていないわよ？それより、貴方は誰なのかしら？」

え、ええ…。もしかして、自分が危険だったことが気がついてないのかな…。とりあえずここは危険だからここから離れてもらおう。

「えっと、俺のことを教える前に今ここは危険だから、あの後ろの子君の友達だよな？友達と一緒に安全な場所に避難してね。」

「うーん…まだよくわかってないけど、とりあえず美咲と一緒にここから離れば良いのね？」

「うん！俺のことは事態が治まってからね。」

そう伝えて、俺は彼女の元を離れてヤミーと交戦していた後藤さんに合流する。後藤さんに少し怒られ、少し俺は申し訳ない気持ちになりながらも戦闘態勢を整える。

「火野!!遅いぞ！」

「すみません、あの子のことを助けてたら遅れました。」

「全く、相変わらずなやつだな。行くぞ！」

「はい！」

後藤さんは大きめのショルダーバッグから武器を取り出しヤミーに向けて構える。

後藤が持っている武器は、灰色のボディに側面中央にガシヤポンによくある緑のカプセルの形をした模様にした模様に黄色のラインが引かれ、見た目がグレネードランチャーのような造形の銃『バースバスター』

取り出してすぐ様に、銃口下部のマガジンを外しショルダーバッグに突っ込ませ、マガジンに装填されたセルメダルを持ち手上部に装

填する。

後藤に続き、火野と呼ばれる青年も先程バイクから取り出し用意していた大型剣を取り出す。彼が持っている剣は、黒のボディにシルバーとブルーの装飾が施され、メカニカルな外観をしている『メダジャリバー』

彼も構えを取り、足を踏み出すと同時に後藤のバースバスターから放たれるエネルギー弾がヤミーに放たれる。バースバスターに装填されたメダルは、そのまま放出されるのでは無くメダルに秘められているエネルギーを変換して集団として放たれるのである。そのため、撃ち終わってしまったセルメダルはただのメダルとなるので、新しくセルメダルを装填しなければならない。

再び、バツグにマガジンを突っ込みセルメダルを装填し撃つ。メダルが尽きるまで同じ繰り返しを行い、火野のサポートをする。

火野はヤミーに地面を強く蹴り、急接近して飛び蹴りを喰らわせ怯んだところをメダジャリバーで斬りつけてヤミーを撃破する。撃破されたヤミーは小さな爆発を起こし、爆破した場所にセルメダルを一、二枚落とす。ヤミーが落としたセルメダル2枚を拾い、メダジャリバーに入れてレバーを動かし装填する。

へチャリン カン！ カカン！

メダジャリバーは、セルメダルを装填させることにより本体の性能を上げることができる。最大3枚まで装填可能で、メダジャリバーのフルパワーを引き出すことができる。

ヤミー達は火野と後藤たちの襲撃に立ち向かうこともできず、二人の見事なコンビネーションにより駅前に群がっていたヤミー達は残すところ後3体になった。後藤は目線の先にいたヤミーに連射し撃破。火野は二体のヤミーに声を張り上げながら、回転斬りを行い二体同時に撃破する。

「セイヤツ！」

パニック状態に陥っていた駅前が、二人の青年の活躍により食い止められた。その様子を美咲とこころは遠くから見守っていた。

凄い……。あれだけの大群を二人だけで倒しちゃった……。あの人たち何者なんだろう……。そんな疑問を持たせることを許さないところは、すぐさまあの人たちに近寄って行く。私も焦ってところについて行く。こころは近寄ってすぐに笑顔になりながら口を開き出す。

「貴方達凄いわね！悪いミイラさん達をやっつけちゃうなんて、もしかして貴方達がお婆さんが言ってた男の人と……。でも、紫の人はいないわね。」

急にこころが口に出した言葉に困惑するお二人。まあ、そりやそうだよ……。この人達はこつちの事情を知らないわけだし。

それにしても……。こころつてば、何も考えずに危険な所に突っ込むのはほんとにやめてほしいよ……。本当に心配しちゃうし、心臓が痛くなるから。とは言つても、こころに伝えたところでやめるつもりはないと思うんだけどね……。

そう考えていると、こころは突然自己紹介をし始めた。

「私は弦巻こころ！ハロー、ハッピーワールドっていうバンドのボーカルをやってるの！こつちが、美咲ね。美咲も、ハロハピのメンバーなの！」

「あー……。奥沢美咲です。その、先ほどは助けていただいたありがとうございます。ございます。」

私は助けてくれたことに対してこころの分もまとめて感謝を伝えた。ほんとにこの人たちには助けられたよ……。私はこころに二人に礼をしろと催促し、こころに礼を言わせる。

茶髪の男の人が反応して、笑顔を見せながら彼も自己紹介を始める。

「ううん、気にしないで！あ、そうだ俺も自己紹介しなきゃね。俺は火野映司。そしてこちらが、後藤慎太郎さん。よろしくね。」

「よろしく。火野、話している最中で悪いが会長から連絡が入った。」

今すぐ鴻上フアウンデーションに来てほしいそうさ。すぐに向かうぞ。」

「あ、はい！ごめんね、俺しばらくこの街にいるから今度会った時話そうね！それじゃ！」

そう言つて映司さんと慎太郎さんは、ヘルメット類を着けてバイクに乗りなおしエンジン音を鳴らしてこの場を去っていく。私はその様子を黙って見送り、こころは呑気に手振りながら「バイバーイ！また会いましょー！」と声に出す。

…不思議な人たちだったな。警察的な人たちだったのかな…？さつきも呼び出しがあつたみたいだし。それに、あのミイラ…本当に存在してたんだ。でもどうして急に現れたんだろ。今までこんなこと起きなかつたのに…。もしかして、私たちの知らないところで何かが起こつてるのかな。

…なんだか、胸騒ぎがするなあ。

駅前中央に、二人の男性がバイクに乗り二人の女子高校生と別れる様子を、少し離れた建物の陰から白いスーツの男が顔を覗かせる。男はバイクで走り去って行く様子を見るとポケットから携帯を取り出し、誰かに電話をかける。数分後電話がかかり、用件を伝え始める。「…ボス、オーズとバースが日本に帰国していることを確認しました。しかし、ドライバーを使わずにヤミーを撃退した様なのでコアメダルの回収は出来ませんでした。…：はい。…：はい。わかりました。それでは、成長型ヤミーの用意をお願いします。はい、失礼します。」

男は携帯の通話を切り、人気の無い通路を歩き自身の目的地へと向

かっついていった。

「会長、火野さんと後藤さんを連れてきました。」
「通したまえ。」

鴻上ファウンデーションに着いた俺たちは、入口で待機していた里中さんの案内の元、鴻上会長が居る部屋まで連れて行ってもらう鴻上さんに許可を取り部屋の中へ入る。入ると、いつもいる机でケーキを作っている鴻上さんの姿があった。目の前まで行くと、一旦作業を止め話始める。

「やあ火野君、後藤君。久しぶりだね。」

「ご無沙汰してます、鴻上さん。」

鴻上会長とは数年前にも関わりがあつて、こうしてお互い姿を見せ合つて話すのは久しぶりだ。俺が海外に行つて調査に向かつてた時に電話越しでちよくちよく連絡は取り合つてたけど。変わつてなさそうで安心した。

鴻上さんはケーキのトップピングを仕上げながら、こうして俺たちを呼んだ理由を説明する。

「君達に来て貰ったのは、これから起こりうる事態に対抗すべく来て貰った。君達も何となく察しているだろう?」

「…さっきのヤミー。」

「その通りッ!!」

鴻上さんは、興奮してか分からないけどテンションが高まり会話を
する際大声を上げながら話す癖がある。突如横から現れて、彼の口癖
「素晴らしいッ!!」を叫ばれる事が何度かあり、驚かないものはいない
だろう。

「数年前、火野映司君のお陰でDr. 真木の野望の阻止、そしてメダルの器による暴走を見事食い止めてくれた。」

彼の言うDr. 真木という人物は、元々鴻上生体工学研究所に勤めていた科学者で鴻上光生のお気に入りであった。映司や後藤が使用していたメダジャリバーとバースバスター、そしてライドベンダーなどメダルシステムと呼ばれる様々な設備、道具、武器を開発していた張本人である。

しかし、彼は少し。いや、かなり歪んだ使命感に捉われていて「物語は終わりを迎えて初めて完成する。」「世界に良き終末をもたらす。」など「終末」に大きな価値観を見出していた。自分とは正反対の鴻上の下では使命を果たす事ができないと感じていて、やがて裏切り80年前に復活した「グリード」と呼ばれる怪人の下へ。さらに、自分をグリード化させ世界を終末へと導こうとしていた。

その使命も、ここにいる火野映司、後藤を含むたくさんの仲間達、そして、己の欲望のために彼と手を組んでいたグリードによって、自身の使命は達成できず自らが終末を迎えた。ここまでが鴻上が話した数年前の出来事。

「一時はグリードによる野望、そしてDr. 真木の終末は防がれたように思えた。しかあし!!再び、ヤミーが地上へと姿を現し人々を欲望の渦へと巻き込もうとしている!」

「でも…ヤミーはグリードにしか作れない筈…。メダルは鴻上さんのところで預けてあるし、意思が入ったコアメダルは破壊してあるから、復活の可能性は無い…」

「そう。だが、これまでの事件を誰かが監視し君達の戦闘データ、グリードの能力、そしてメダルの研究をしていたら…?」

メダルは800年前の錬金術師に造られた、つまり人工的に生み出された物。そして、今の日本や世界の工業は爆発的な成長を遂げている…まさか!!

「…当時のデータを元にコアメダルとセルメダルを作成し、再びグリードを復活させようとしている。」

グリードの復活の意味。元々グリードは人間の欲望を糧に生きる擬似生命体。9枚のコアメダルと大量のセルメダルで構成され、最初は10枚存在していたコアダルから1枚を抜き取り、9という欠けた数字にした結果「足りないが故に満たしたい」という欲が生まれ、やがて欲望が進化し自我を持ち始めて誕生したのがグリード。しかし、その欲望は決して満たされる事はない。故に永遠に満たされない欲望から、建物や植物、そして人間もろともやがて世界そのものを喰らい尽くしてしまう。その脅威に曝される事がグリードが復活する意味に隠れているのである。

「Exactly!!そして後藤君、それを目論んでいる組織の目星は既についている様だね?」

「はい。こちらの方で調査を行った結果、一つだけあてはまった組織がありました。」

後藤の口から明らかに、今後グリードやメダルの力を使い鴻上ファウンデーションや映司達にとって危険な存在であり敵対するであろう。その組織の名は――。

「財団X。死の商人とも呼ばれている裏世界の巨大組織です。」

財団X――。

その素性は表の世界では名が知られることのない組織。様々な他組織に資金援助を行い、見返りの一つとして独自で研究した道具の成果の蓄積を行なっている。その道具の内にメダルが研究対象として入っているのは間違い無いだろう。

昔の事件に、隣街でヤミーやグリードとはまた違った怪物が暴れていたという事例があった。その事件にも、財団Xが深く絡んでいた。

一体何を目的として、このような行いをしているのか未だに明らかにされていない。だが、少なくともその目的が良からぬ目的である事に

は確實であろう。

「財団Xの計画を阻止するためにも、君達には再び戦ってもらいたい。ここにはいないが伊達君にも協力してもらおうつもりだ。」

鴻上から出てきた「伊達」という人物。彼も数年前に映司や後藤とともにグリード達と死闘を繰り広げてきた仲間である。彼も、鴻上に呼ばれていたのだが職業である医者としての仕事が忙しく手が離せないため帰国が遅れるとの事。数日遅れて日本に帰国する予定らしい。

鴻上は二人に戦ってもらうためにと里中にある物を持ってきてくれと要求する。

「里中君。アレを持ってきてくれるかい？」

「既にご用意しています。」

そう言った里中はいつの間にか大きめの黒い箱を持っていた。

「流石、里中君。仕事が早い。火野君、君から預かったドライバーとメダルを返却する。」

里中は、鴻上の言葉に続いて持っている箱の蓋を開ける。その中に入っていたのは、中央には3つの窪みがある特殊な模様をした長方形で、鴻上がドライバーと呼んでいた物。その後ろにはドライバーの模様を意識した何かが大量に入っている小さめの箱が入っていた。元々これは、映司が所有していた物で旅立つ際に鴻上に預けておいたのだ。

映司はその二つを手に取り、じっと見つめ、鴻上に向き直す。

「期待しているよ。そして後藤君、君達のドライバーについてだがアップデートが間に合っていないなくてね、暫く君と伊達君には生身で戦ってもらおうよ。」

「わかりました。」

後藤は鴻上に言われた事を理解し、鴻上は一通り話し終えたところで解散を宣言する。

「今日はこれでお開きにしよう。明日からよろしく頼むよ。あ、また、セルメダルの収集も忘れずにね。」

そうして、里中と後藤が「お疲れ様でした。」「失礼します。」とそれ

ぞれ告げて鴻上の部屋を外出した。それに遅れて映司も「失礼しました。」と言葉を告げてから部屋を出ようとしたところで、鴻上に呼び止められる。

「火野君、少しいいかい。」

「え? いいですけど... なんですか?」

「... 彼のメダルについてだ。」

「!!」

その言葉を聞いた瞬間、映司は顔色が一瞬にして真剣な表情に変わる。

「君が、メダルを私の元に預け、さらに各国に渡り調査を行ってくれたおかげでいくつかわかったことがある。」

調査とは、彼が世界を渡り歩いてきた理由にあつた調査のことで、世界各国を渡り鴻上フアウンデーションの研究協力員として、彼が肌身離さず持っている彼にとって大切なコアメダルを復元する為に調査をし、その度に日本の本社に情報を送っていたのだ。

映司は、鴻上の言葉をただ黙って聞く。

「メダルの復元についてだが、可能かもしれない。」

映司は、その言葉を聞いて目を大きく開く。鴻上は、窓を見ながら続ける。

「だが、まだまだ研究しきれてない物が多い。時間がかかるが、何かわかったらすぐに連絡しよう。」

少し残念そうな素振りを見せるが逆に、メダルが元通りになる可能性がでてきた事に喜びを感じようとポジティブに考え、鴻上に頭を下げる。

「...ありがとうございます。」

二人がいる部屋を、そして彼を夕陽が赤く染める。

映司はズボンの右ポケットを強く握り締め、窓ガラスから照らし出

す夕陽を見つめる。

空に羽ばたく赤い羽を思い浮かべながら。

「今日は夕陽が綺麗に見えるなあ…。」

パンツと怪力娘と再臨の王

「……んっ……ふわぁ……」

肌に光を感じた俺は、朝になったことに気づき塞がっていた目を開く。歪んだ視界を擦って治して大きく伸びをする。小鳥の囀りが響き渡る日曜の朝。清々しい気持ちになりながら重い体を起こし、小さく呟く。

「いい天気だなあ……」

雲一つない快晴の空。太陽の光に照らされながら、昨日の夕方に鴻上さんに伝えられたことを思い出す。

へメダルの復元についてだが、可能かもしれない。く

俺はポケットからある物を取り出す。俺があの時掴み取った、俺にとつてかけがえのないアイツとの唯一の繋がり。空を仰ぎ手に握りしめながら、もう一度伸びをしアイツに喋りかけるように呟く。

「んっつ、はあ。…絶対にもう一度、お前の手を掴み取ってみせる。」
気が済んだ俺は公園のベンチから立ち上がり、そばに立て掛けておいたパンツをぶら下げた木の枝からパンツを取り、そのパンツを近くの水道で洗う。そういえば、もうそろそろバイト探さなきゃな…：しばらくは日本に滞在するつもりだし。難なく過ごせるお金と明日のパンツを買えるぐらいのお金は貯めないとなあ。

少し、変な発言をしている映司だがそんな彼はこの公園のベンチで野宿をしていた。鴻上ファウンデーションを出た後、彼には宿に泊まるほどの金は持ち合わせていない。決してお金が全くないというわけではない。いくつかの食料と、パンツを買うお金しか無いのだ。

彼曰く、「ちよつとのお金と、明日のパンツさえあればいける。」だそう。ちなみに確証はない。足りなくなったら、今滞在している国

もしくは次の目的地で稼ぐようにしている。実際にこのような生活を何年も行なっている為、彼自身全然苦痛に思う事はないようだ。とんだ変わり者である。

洗い終えたパンツを、水気を無くしてから再び木の枝に掛け直す。

「今日はパンツがよく乾きそうだなあ。」

謎発言を残して、彼は再びベンチに横になった。

そこまでの一連の流れを見ていた、中年の男性は開いた口が塞がらなくなっていた。「世の中にはいろんな人がいるんだな。」と感じたのであった。

1人の男が、闇が続く窮屈な地下道を歩き続ける。段々と光明が見え始め闇が払われていき、やがて地下道を抜けると、金属と金属が互いにぶつかり合うの様な音が耳に入り込んでくる。そして、ようやく見えて来た出口の先を通り抜けて、彼の姿がはつきりと目視できる様になる。

映司達を陰から監視していた、白スーツの男。彼こそ、映司達が追っている財団Xの1人。

そして、彼が入り込んだこの場所は、財団Xの基地であり、セルメダルを大量に生産する工場でもある。さらに、その隣には全面特殊加工ガラスで張り巡らせた実験室、全フロアを監視し侵入者がいた場合直ちに知らせる管理室。

その奥にある部屋はこの施設の支配者、そして財団Xの幹部である人物の部屋。映司達にとっての宿敵である人物が、その部屋で不気味な笑いを漏らしていた。

スーツの男は、幹部の笑いを気にする様子を見せずに実験室の部屋へと足を運ぶ。

「ヤミーの方はどうなっている。」

ドアを開け、実験の様子を見ていた作業員に話しかけると、今から実験を行うとのことだ。ガラスので囲まれた部屋を見て見ると、部屋の中には横一列に立て並ぶ謎の機械が4つ。その周りには何千ものセルメダル。機械の方に視線を移すと、小さなガラスケースの中に電線が張り巡らされ、繋がっている先を見るとそれぞれ違う色のコアメダルが3つずつ。

合図を入れることもなく作業員が、手で握っていたスイッチを押す。すると、電線から目で確認できるほどの強い電流が流れ出す。やがて、コアメダルがセットされていた装置に辿り着き、セルメダルの方へ電流が走る。

すると、セルメダルが地から離れて空中に浮き出す。金属と金属が擦り合う音の中セルメダルはやがて自身が動くための身体を形成し始める。

暫くして、4体の人ならざる物、ヤミーが身体の形成を終え地面に足を付ける。

蟻螂の化物、猫の化物、野牛の化物、鮫の化物が生み出された。

昆虫系、猫系、重量系、水棲系と分類される4体のヤミー。ヤミーはグリードが人間にセルメダルを投入し、その人間の欲望を暴走させ具現化させた欲望そのもの。人間の欲が無ければ、ましてやグリードがいなければヤミーは生成する事はできない。

しかし、財団Xは人間の欲望、グリードの力を使わなくともヤミーを生成させる事に成功させたのだ。その反面、通常ヤミーを生成するのにセルメダルが1枚で問題無いが、大量のセルメダルが必要とする。

さらに言えば本来ヤミーはグリードの指示に従うのだが、現在はそ

それぞれのコアメダルに意思を持ったグリードは存在しておらず、このヤミー達は財団Xにより人工的に生み出された為財団Xの指示に従う様に細工されている。

男はヤミーが生成された事を確認すると、ガラス張りの部屋に入り4体のヤミーを引き連れ地上を出ようと入ってきた施設の入口の方へと向かう。

「ようやく動き出す……。リーダーの目指すものへ……。」

駅前騒動が起きた翌日、私達5人はこころの屋敷にてバンドの練習の前に花音さん、はぐみ、薫さんに駅前で起きた出来事をこころと私は質問攻めされていた。こころはノリノリでその時の状況を話すが、私はあまり乗り気でなかった為、あまり話さずこころの後付程度にで終わらせていた。

あの後、映司さん達と別れた後騒動の事で頭一杯ですっかり3人のこと忘れてたんだよね……。

家に帰る途中で思い出して、メッセージで謝罪して今日に事情説明をするって事でこうなってるわけ。それより、3人に凄い心配かけちやったから非常に申し訳ないな……

今、ローテンションな私に比べて正反対のハイテンションのこころは、あのミイラのことと助けてくれた映司さんと後藤さんについて語った。

「それでねーそのミイラさん達を慎之介がバッシュンって感じで、映

司がジャキーンって二人だけで倒しちゃったのよ!」

うーん…間違つてなくはないけど、擬音とか効果音に違和感を感じる。こころの発言を聞いたはぐみは、ある事に閃く。

「もしかして、その二人がお婆さんが話してた赤色の人と紫色の人の正体なんじゃないかな!」

「そうかしら?二人とも色が全然違つたわよ?」

「謎に包まれる紅と紫の人物…もしかしたら、彼らはこの世界を救つた勇者なのかもしれない…。ああ…! 儂い…。」

勇者つて…薫さん歴史物の見過ぎ…。とはいえ、昨日のミイラの件もあるからもしかしたら勇者も存在してるんじゃないかって疑つちやうなだけどね…。

心の中でツツコミだり思考を巡らせる私はため息を溢す。すると隣に居た花音さんが、話しかけてきた。

「美咲ちゃん。」

「? 何ですか、花音さん。」

「大丈夫? なんか凄い言葉に表しづらいけど、何となく疲れてるように見える…。」

「へ?」

突然そんなこと言われたもんだから間抜けな返事をしてしまった。まあ…確かに花音さんの読み通りで昨日の騒動で疲れてるつてもある…けど、理由は他にもある。

それは、昨日映司さんと慎之介さんが去っていった後に感じた妙な胸騒ぎ。こころたちから感じる物とはまた別で嫌な予感がしていて、気になってしょうがない。それに、今日の朝にも少し…。まあ、あまり気にしても仕方ないから気にしない様にしてただけど花音さんにはバレちゃってたか。こころももしかしたら気付いてたのかもしれないけど。

とりあえず、花音さんに心配しないでとだけ伝えとこう。

「心配しなくて大丈夫ですよ。まあ、疲れてはいますけど特に支障はないので。」

「そ、そう? それなら良いんだけど…。」

「決まりねっ!!行くわよ、花音、美咲!」

「え?」

これまた突然、こころの発言に今度は花音さんと同時に疑問符を出してしまふ。どうやら、私と花音さんと二人で話している最中3バカが今日もまた笑顔パトロール隊としてパトロールをしようと(勝手に)決めたらしい。あることを思った私はこころに反論するように答える。

「やめたほうがいいと思うけど。昨日のこともあるし、それにああいうのって警察の人とかに頼めばいいと思うし、少なくとも女子高生の私たちの出る幕は無いと思うけど。」

少し、キツク言いすぎた気もするけど実際事実なので仕方がない。が、こころがそんな簡単に諦めてくれる事はなく。

「どうして?この世界の皆がヒーローなのよ?」

「そうだよ!ヒーローが人々を守らなくてどうするの、みーくん!」

「それに、私達には世界中を笑顔にするという重要な使命があるじゃないか。」

「そうよ!だから、そんなこと言わないで一緒にいきましょう!」

はあ…まあ、説得したところでこういう結果になるって目に見えてたけどね…。こうなってしまった以上、もう食い下がる事は出来ない。素直に折れるしかないか…。

心の中でも現実でも溜息を吐き、こころの提案を了承する。

「…はあ、はいはいわかりました。私もついて行きますよー。」

「ふふっ。」

私の顔を見て隣の花音さんが微笑んだ。何でだろうか?

「それじゃ決まりね!早速出発しましょう!」

そう言ったこころは勢い良く立ち上がり、早々と部屋を出ようとする。全く、いつもストッパーの役をする私の身にもなつてほしいよこころには。そう思いながらこころを見て微笑む。

と、こころが突然廊下の真ん中でピタリと止まる。

「あら?」

何かあったのかな?…私はこころの隣に行き、視線の方向を見てみ

ると、男性と女性が黒服さん達と歩いてた…って、映司さん!?

「あら、映司じゃない! どうしてうちに来てるのかしら?」

「あ、こころちゃん、美咲ちゃん!」

私達に気づいた映司さんは笑顔で振り向いてくれた。こころは映司さんに近寄り、黒服さんたちが事情を説明してくれた。

「火野様は、昨日こころ様達をお救いくださったので、主人の方からお礼がしたいとのことで呼ばせていただいた所存です。今は送り迎えをしていた途中でございます。」

「いやー、別にお礼もらう為に助けたわけじゃないんだけど、中々折れなくて大変だったよ。」

「そうだったのねーでもどうして映司はお礼を貰わないのかしら。」

純粹な疑問だったのか、こころは正直に映司さんに質問する。確かに、こころのお父さんだし願いの一つや二つ簡単に叶えられそうだけど。

「え? うーん…どうしてだろ?」

へ?

「欲がなくなつた時期が長かつたからかな? それか、単純に今欲しい物がないか…あ! 明日のパンツ! そうだあ、明日のパンツが欲しいって言つとけば良かったあ…!」

パ、パンツ? え、何で? パンツぐらい普通に買えるじゃん…。というか、何でパンツ?

そう思いながら、膝から崩れ落ちて落ち込んでる映司さんを呆れながら見る。失礼かもしれないけど、ひよつとしてこの人も馬鹿なのか? こころ達と似た雰囲気があると、こころの方を見ながら考えていると後ろからはぐみと薫さんが話に入つて来た。

「何話してるのー? はぐみも混ぜてー!」

「君が、火野映司さんだね? 是非、こころが話していたミイラについて聞かせていただきたい…!」

あー、3バカ揃つちやつたよ! ややくしくなるから出来れば来て欲しくなかつた! 頭を抱えると、後ろから花音さんの失笑が聞こえて来る。というか、当初の目的のパトロールはどうなったのよ…。

すると、映司さんの隣に居た女性がこちらに近づき声をかけて来た。

「面白い子達だね、君のお友達。」

「そういえば、貴女は…。」

「私は泉比奈。映司君のお友達、よろしくね。」

ああ…まともそうな人がいて助かったよ…。心の中で安堵しながら私も挨拶を返す。

「あ、こちらこそ、奥沢美咲です。よろしくお願いします。」

「松原花音です。よろしくお願いします。比奈さんはどうしてこころちゃんのお家に？」

「私は、ただの付き添いだよ。映司君と偶然道で会ってねー。」

数分前

公園で3時間程パンツを乾かしていた映司は、朝ごはんを食べようと移動し始める。歩いていると自身の喉が渴いた事に気づき近くにある自動販売機でお茶を買おうとする。彼は何故か乾かしてポケットに丸めたパンツを取り出し、さらに何故かパンツの中から小銭を取り出した。

現在の残高は500円玉1枚と5円玉2枚と1円玉3枚、合計513円。そろそろバイトしなきゃなと思いつながら500円を手に取り出そうとするが、手から滑り落ちてしまい自販機の下へと吸い込まれてしまった。

「ああ！しまった！」

焦燥感に駆られ、地面に顔を擦り付け必死に500円玉を取り出そうと試みるが、奥の方まで転がっていつてしまい、さらに3mm程度の空間しかなく映司の手はギリギリで手首から奥が入っていかない。

映司は素直に諦めてバイトを探そうと手を戻そうとするが。

「あ、あれ？ぬ。抜けないい！」

なんと、かなりギリギリだったらしく、手の甲が引つかかって抜けなくなってしまう。絶体絶命(?)のピンチに、一人、映司の異変に気づいたのか映司に駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

聞こえて来たのは女性の声。声をかけてくれた女性に助けを求めようとする前に、女性の方から予想もしない言葉が発せられる。

「今、持ち上げますね。」

「え?」

女性はいえぬ一言の後に、自販機の両端を掴み言葉の通り持ち上げた。

「ふん、にゅ〜!!」

まさに、有言実行である。

重量が、中身が空の状態でも300〜450キロもある自販機。さらに中身が入っている状態な為それ以上に重い自販機を、さらに言えば一人の女性が難なく持ち上げた。

その光景はまさに異常だと言いか言いがなく、通りかかった人全員が注目し全員が絶句し驚きを隠せなかった。

と、映司はある事に気づく。

(あれ…?これ…前にも似たようなことがあった気がする…。)

と思い、顔を上げて見ると女性の姿がハッキリと見えた。

白のワンピースに白のハットをかぶった女性。

その顔に見覚えがあった。

「比奈ちゃん!？」

映司の声に気づいた比奈と呼ばれる女性は目を見開き、驚きの表情を見せながら答える。

「映司君!？」

数年前と似たような場所、展開で二人は再会した。

「まさか、こんなところで比奈ちゃんと会えるなんてね。」

「ほんと、映司君全然変わってない。」

俺と比奈ちゃんは、無事に500円玉を取り戻した後に広場のベンチに座ってこうして会話をしている。お互い、昔から変わってない事に懐かしさを感じさせていた。

「あ、でも…俺じゃないけど、変わった事はあるかな…。」

俺は比奈ちゃんにヤミーが復活した事、そしてメダルを使って再びグリードを復活させ、自らの悪事に利用しようとする財団Xについて伝えた。

「そんな…それじゃあまた、数年前みたいに人の欲望からヤミーを生み出したって事?」

「わからない…。だとしても、俺はヤミーやグリードをもう一度倒し、欲望に飲み込まれた人たちを助ける。そして、財団Xが何を企んでるのかわからないけど計画を阻止する。」

「…うん、そうだよね。いろんな人に手を差し伸べてあげる。それが映司君だもんね!」

比奈ちゃんが応えた後、俺は一緒にアイツのことも伝えた。比奈ちゃんは驚きで手を口に当てる。まだ、研究が不完全な状態だから何とも言えないけど、少しでも可能性を感じられるのなら俺は信じる。アイツがまた、俺達の所に帰って来ることを。だって、俺たちはアイツの…。

「火野映司様ですね?」

「へ?」

突然、比奈ちゃんとは別の俺の名前が聞こえて来て変な声出ちゃった…。声がした正面の方向を見てみるとサングラスをかけた黒服の人物が目の前にいた。俺は警戒し、比奈ちゃんの前に立ち守るように手を広げる。

「警戒なさくらなくても、私たちは貴方方に気概は加えません。申し遅れました。私は、弦巻ごころ様のSPをさせて貰っています。」

ん？弦巻ごころって昨日助けた…。俺は警戒を解いて黒服の人は淡々と言葉を発した言葉を聞く。

「主人より、ごころ様を助けていただいた事に感謝をしたいとの事です。我々について来ていただけないでしょうか。」

「と、いうわけなの。」

「へ、へえ〜そうなんですな〜……。」

ひ、比奈さん…。貴女、本当に人間ですか？何、自販機持ち上げるって。完全に人を超えた領域に入っちゃってるよ。まともな人かと思っただけど、ある意味まともじゃなかったね…。

比奈さんの怪力に顔が引きつらせながら心の中でツツコミを入れる私。

同じく顔を引きつらせて「あはは…。」と声を漏らす花音さん。

さらに、あつちで変なことをしているごころ、はぐみ、薫さん、そして混ざっている映司さん。

そしてただ見守るだけの黒服さん。もうわけわかんない。

とカオスな状況を打破する様に、誰かの携帯の着信音がなる。映司さんの携帯だった。すぐさま取り出し耳に当てると。

「え…！わかりました、すぐ向かいます！」

電話を切ると、焦った表情を見せながら廊下を走って行ってしまった。

「映司君！」

比奈さんも映司さんについていくように走っていく。

「鬼ごっこでも始めるのかしら？私もやるわー！」

と言いながら、猛スピードで追いかけていった。こんな時に鬼ごっこなんかするわけないじゃん！

「ふええ〜…どうしよう…。」

「えーくん、凄く焦ってたよ？」

「彼が心配だ…私達もついていこう。」

このパターンは…あーもう！結局こうなるんだから！

「はあ…じゃあ、早く私達も追いかけるよー！」

映司さんが、焦りながら走って行った…もしかして。

4人は、映司、比奈、こころの後を追う。そして美咲は、心の中で不安と悪寒を感じ取っていた。

俺は後藤さんから教えてもらった場所にライドベンダーを使って、急いで向かう。さっきの電話はまた街中でヤミーが暴れ出したとのこと。だけど、昨日の時とは少し様子が違った。

『え…！成長したヤミーが暴れてる!?!』

へああ、しかも4体もだ。俺も急いで現場に向かっている。お前も急げ！

昨日は白ヤミーで、今は成長したヤミーが街を襲ってる。もしかして、もうグリードは復活したのか…？考えたくもないけど、それより今はヤミーをどうにかしないと…！俺はライドベンダーをアクセル全開で動かして、ようやくその場所に着くことができた。

叫び声や断末魔を響かせ、躓きながらも必死に逃げようとする人々。それを許さないヤミー達。昨日よりも、酷くそして残酷な光景が映司の眼に映った。

バイクを降り、ヘルメットを脱いで一早く向かおうとすると後ろから後藤さんの声が聞こえてきて振り返ると、同じくライドベンダーに乗ってきた後藤さんの姿を確認する。

「火野!!」

「急ぎましょう!早くヤミーを止めないと!」

そうして、後藤はバースバスターを構えて走りながらエネルギー弾を発射させる。ネコヤミーとサメヤミーに被弾し怯んだ隙に、映司は逃げ遅れた人の手助けをする。

「早く!今のうちに逃げて!!」

逃している映司に気がついたカマキリヤミーは両腕に備えられている、名前の通り螳螂の特徴である湾曲している鋭い鎌を映司に振るう。その鋭さはコンクリートやアスファルトを切り刻める程の力がある。当たってしまえば人などいとも簡単に真っ二つされるだろう。

そうはさせまいと、映司は自身の身体能力の高さを見せつけるかの如く、ヤミーの攻撃を後方倒立回転(バク転)を連続で行い回避する。さらに、隙を付いた映司は上段回し蹴り、後方回し蹴りを連続で叩き込みヤミーを後ろに吹っ飛ばす。

「ふっ!はっ!」

「ウツ...ガア...」

続いて後ろで構えていたバイソンヤミーがまさしく猛牛の如く、頭部に鉄が埋め込まれた頭を映司に向け勢いよく映司に突っ込み頭突きを喰らわせようとする。それを跳び箱と同じように軽々と飛び越して、バイソンヤミーはそのまま建物の柱に当たり、当たった柱は抉り取られる様にコンクリートが粉々に砕け散る。

「よっ!」

「グオツ...!」ドゴオオオン!!!

再びカマキリヤミーが自分にかかって来るのを見て、何処からかメダジャリバーを取り出し胴体を水平方向に左、右と連続で斬る。ヤ

ミーは、反撃する隙を与えられず、ただセルメダルを落とすだけであった。

映司は落としたセルメダルを3枚メダジャリバーに入れて、ヤミーを切り上げるとさらにメダルを落としたながら階段を転げ落ちていった。

今度はバイソンヤミーに攻撃を仕掛けようと構えるが、バイソンヤミーは自身の蹄状の両腕をぶつけ合い、地面に叩きつける。

「ウウウウ！ガアツ!!」

「ちよ、うおおお!!」

すると、映司が突然地面から足が離れ空中に浮遊し始めた。バイソンヤミーは『重力操作』という特殊能力を持っている。体内のセルメダルを大量消費し発動することが出来る能力で今、映司を浮かせたのもその能力のせいだ。

浮かされた映司は、階段下に停まっているリムジンに背中を強く打ち付けた。あまりにも衝撃が強すぎて、視界が歪み少しの間起き上がれなくなってしまう。

「うっ…ぐあッ…。」

「火野ッ!!」

後藤が映司の元に駆け寄ろうとするが、サメヤミーに行く手を阻まれる。

映司は、少し時間をかけて立ち上がると後ろから声をかけられる。比奈の声だ。

「映司君!!」

「比奈ちゃん!? つ。」

「映司さん!?だ、大丈夫ですか!?!」

同時に美咲からも声をかけられる。どうやら、映司が叩きつけられたリムジンはこころ達が乗ってきたリムジンであった。

「俺は大丈夫…。それより、後藤さんが…!」

「な、何あれ…!変なのがいっぱい居る!」

「ふ、ふええ…!」

「…。」

「どうしたの薰？顔が真っ青になってるわよ？」

こころ達はヤミーと交戦中の後藤の方を見て驚きの声をそれぞれ挙げる中、映司は懐から鴻上に渡されたバックルを取り出す。それを見た比奈は、心配そうに映司に声をかける。

「…映司君…。」

「…大丈夫、無理はしないよ。それに、ヤミーと戦うのは俺の専門だからね。」

そう言つて、映司は一步ずつ前へ歩き出し先程映司が階段から落ちたカマキリヤミーの方を見据える。

カマキリヤミーも映司を見据え、ジリジリと映司達に近寄る。映司は比奈に逃げるよう声を掛けるのと同時に手に持っていたバックルを腰に取り付ける。

「比奈ちゃん、皆を連れて隠れてて。」

腰に取り付けたバックルは一瞬にして銀色のベルトが巻かれ、右腰部分には金と銀の装飾がされた黒の装置、左腰にはベルトと同色の小さな箱が出現し特殊なベルトが完成する。

映司は、備え付けられた銀の箱を開くとその中には金色に縁取られ生物の紋章が描かれたメダル。通称『コアメダル』が収納されており、そのうちの3枚を取り出す。

取り出されたメダルは全て異なる色で赤、黄、緑の三色。そのうち赤と緑のコアメダルをバックルの左右に装填、続いて中央に黄色のメダルを装填しバックルを傾けると、波紋の様に装填したメダルの色に発光する。映司は右腰に備えられた装置を手取る。

すると、手にした装置から不思議な機械音が鳴り出す。映司はベルトに装填したコアメダルを読み込ませるように、勢いよく機械を翳かきす。

〈キンーキンーキンー！〉

音が鳴り、ベルトから3色の二重の円が浮かび上がり、そして静寂が訪れる。映司が次に放つ言葉を待つかの様に。

皆を助ける為に。

目の前の敵を倒す為に。

二度と同じ出来事を繰り返させない為に。

己の欲望を叶える為に映司は告げた。

「変身！」

放たれた言葉と同時に映司は機械を胸に翳す。すると映司の頭部、胴体、脚部に5色5枚のメダルが出現し、頭部は縦、胴体脚部は横に回転し始める。

そして、映司が装填した赤、黄、緑のメダルが選ばれ、三体の動物が描かれたレリーフが組み合わさって一つの円となり、映司の胸部と合体すると映司の周囲に三色の閃光が交互に出現し、同時に脳内に歌が流れ出す。

まるで王の再誕を祝うかの様に。

《タカ！トラ！バツタ！》

《タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！》

映司の変化を見ていたところ達は感銘を受けた。

赤の頭部には、優れた飛翔能力で大空を飛び交い、鋭い爪、嘴を使い狙った獲物を狩る『鷹』

黄の胴体には、別名「密林の王者」、優れた身体能力を持ち単独の戦闘能力ではライオンを凌駕する『虎』

緑の脚部には、大地を蹴り、体長の十倍の距離を移動可能な力強く長い脚を持つ『飛蝗』

三体の動物の力を体内に宿し、無限を超えた進化をし強大な力を発揮させるその姿はこう呼ばれていた。

「
H
a
p
p
y

B
i
r
t
h
d
a
y
!!!!!!!
仮
面
ラ
イ
ダ
ー
O^オ
O^イ
O^ズ
」